

C-11 パーソナルカラーの研究(第5報) 2色配色の場合
東京家政学院短大 今井弥生

目的 第4報までは発達段階におけるパーソナルカラーを単色を主として報告した。第5報からは2色配色についても発達段階的に追求し、パーソナルな配色と服装構成色彩との接点について検討する。

方法 1970年で12歳の被験者(女子75名)は1975年では17歳に達する。その期間、毎年11月に質問紙法でJ I S Z 8723に従って試料142色の標準色票を観察させ、パーソナルカラーを単色と2色配色とを選ばせる。分析、表示はJ I S Z 8721に準じた。

結果 単色で白、黒をパーソナルカラーとした被験者は2色配色にもその影響が強い。

個人の年齢増加に伴うパーソナルカラーはさまざまであり、75のパターンを抽出した。これは配色嗜好に強い個人差があるということを裏付けるものである。

被験者平均では12歳白と青、13歳そのほか白と赤、14歳はさらに白と黄、白と青紫、15歳赤と白、白と黒、16歳黄赤と黄、17歳黄赤同志などで、16~17歳に黄赤との配色が積極的となるが、これは明度、彩度の属性に左右される。単色の場合、白、黄の頻度率が大きい。2色配色構成においても、白または黄を選んでから他の色彩を選ぶ傾向が強く、これは白、黄を自然に欲求する青年期の特徴といえる。